

暴走する「ぶれない政治」

表題は毎日新聞9月2日夕刊特集ワイド「この国はどこへ行こうとしているのか」だ。今回は政治学者の杉田敦さんである。

「安倍首相は『国会議員による多数決で選ばれた自分に全権が委ねられている』と勘違いしている。内閣と国会の関係を全く理解していません」。内閣と国会。その関係は憲法41条で、国権の最高機関は国会と定めている。杉田さんは、この基本原則さえ、安倍首相は理解していないと指摘するのだ。首相のヤジを「またか」とうんざりするだけではないという。首相の立場は国会より上にある、との姿勢が透けて見えるからだ。



安倍政権の「ぶれない政治」による弊害は他にもある。「安倍政権では『全権を首相に預けるトップダウンのほう物が物事の決定が早い』『議論に時間をかけるよりも多数決が重要』という民主主義観がじわりと広がっています。私はこれを『暴走する民主主義』と位置づけています」暴走する民主主義とは何か。権力を一元化し、あらゆるブレーキを取り払い、権力を抑えるものを排除する。つまり、立憲主義的な民主主義の否定だ。

ここまで安倍政権への批判として聞いたのだが、ドキリとする言葉を口にした。「暴走する民主主義を望む潜在的な心理が国民の中にもある」と。どういうことなのか。「経済的に余裕がなくなり、生活を守ることに追われ、さらに国を取り巻く環境の危機を政治家が叫ぶようになると、イメージの湧きにくい安全保障や外交問題は強いリーダーに引っ張ってもらいたい、という心境になりがち。多くの人々の意見に耳を傾けるよりも、自らの固定観念を曲げない、つまり『ぶれない』リーダーでなければあらゆる危機が乗り切れない、と不安を覚えてしまうのです」

今、社会の土台が揺らいでいるように見えるが、杉田さんは「首相のかたくなな姿勢を見ることで、多くの国民が安保法案の本質に気づき、反対しているのです」とも語る。「法案の目的は、米国の機嫌を損ねないためだと。そんなことのために、戦後日本が築いてきた平和や立憲民主主義を失うわけにはいかない。これまで当たり前のようにあった価値を再認識することで、安倍首相の説明には説得力がないと感じているのです」

「憲法を巡る議論はこれからも続く。民主主義国家である限り、政権は選挙で国民の審判を受けなければならない。意識を高めた有権者の存在が重要になる場面は何度も訪れます。諦めてはいけません」

(2015年9月6日)